

# 帽子〈マルガエ〉

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

D0101

ウランバートル・ナラントール市場  
／モンゴル

参照資料

『草原の遊牧文明』

p.50、p.80

a



эмэгтэй малай

b



жанжин малай

c



тоорцог

d



үстэй малай

м а л а й



a 女性帽〈エメグテェ・マルガエ〉 b 將軍帽〈ジャンジン・マルガエ〉 c 丸帽子〈トルツォグ〉 d 毛皮帽〈ウスティ・マルガエ〉

モンゴル人男性にとって帽子は身だしなみの一部であり、出かける際には欠かせません。来客と挨拶を交わす際には、家の中でもきちんと帽子をかぶって相手に敬意を表します。モンゴル人には天に対する信仰があり、天と人を結ぶ頭を神聖な部分だと考えています。そのため、頭にのせる帽子も大切に扱われ、床においたり上下逆さまにおいたりすることはしません。

## 小長谷先生からのひとこと

女性用の帽子は側面にビーズがついており、肌色が美しく小顔に見える効果があります。

# 長衣〈デール〉（男性用）

D0102

ウランバートル／モンゴル

モンゴルー草原のかおりをたのしむ



参照資料

『草原の遊牧文明』

p.50、p.80

Д ЭЭ Л



デールには晴れ着と普段着があり、お出かけや結婚式など特別な日には絹でできたものや刺繍模様のはいたものを、それ以外の時には木綿のものまたは古くなった絹のデールを着用します。デールの下には洋服を着ており、ズボンにブーツというのが一般的です。伝統的なデールは風が隙間から入り込まないように工夫されており、ウマに乗るのに適したデザインになっています。一方、現代の都市部で暮らす人々、特に女性のデールは上下がわかれたスーツ型や、体のラインにそったドレス型など多種多様なデザインになっています。都市部では洋服が普段着であり、特別な日に「おしゃれ」デールを着る人が多いです。（〔参考文献〕野沢延行 1991『モンゴルの馬と遊牧民—大草原の生活誌』原書房）

# 長衣〈デール〉（男子用）

D0103

ウランバートル／モンゴル

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

参照資料

『草原の遊牧文明』

p.50、p.80



Д ЭЭ Л



デールには晴れ着と普段着があり、お出かけや結婚式など特別な日には絹でできたものや刺繍模様のはいたものを、それ以外の時には木綿のものまたは古くなった絹のデールを着用します。デールの下には洋服を着ており、ズボンにブーツというのが一般的です。伝統的なデールは風が隙間から入り込まないように工夫されており、ウマに乗るのに適したデザインになっています。一方、現代の都市部で暮らす人々、特に女性のデールは上下がわかれたスーツ型や、体のラインにそったドレス型など多種多様なデザインになっています。都市部では洋服が普段着であり、特別な日に「おしゃれ」デールを着る人が多いです。（〔参考文献〕野沢延行 1991『モンゴルの馬と遊牧民—大草原の生活誌』原書房）



# 上着 〈フレム〉

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

D0104

ウランバートル／モンゴル

参照資料



хүрэм



防寒着としてデールや洋服の上からはおります。





# チョッキ付き長衣〈デール／ハンターズ〉 D0105

ウランバートル／モンゴル

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

参照資料

『草原の遊牧文明』

p.50、p.80



ДЭЭЛ, ХАНТААЗ

チョッキ（ハンターズ）と長衣（デール）は別々でも着用できます。

# 長衣〈デール〉（女性用）

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

D0106

ウランバートル／モンゴル

## 参照資料

『草原の遊牧文明』

p.50、p.80



Д ЭЭ Л



デールには晴れ着と普段着があり、お出かけや結婚式など特別な日には絹でできたものや刺繍模様のはいたものを、それ以外の時には木綿のものまたは古くなった絹のデールを着用します。デールの下には洋服を着ており、ズボンにブーツというのが一般的です。伝統的なデールは風が隙間から入り込まないように工夫されており、ウマに乗るのに適したデザインになっています。一方、現代の都市部で暮らす人々、特に女性のデールは上下がわかれたスーツ型や、体のラインにそったドレス型など多種多様なデザインになっています。都市部では洋服が普段着であり、特別な日に「おしゃれ」デールを着る人が多いです。（〔参考文献〕野沢延行 1991『モンゴルの馬と遊牧民—大草原の生活誌』原書房）

# 長衣〈デール〉（女子用）

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

D0107

ウランバートル・ノミン百貨店／モンゴル

## 参照資料

『草原の遊牧文明』

p.50、p.80



Д ЭЭ Л



デールには晴れ着と普段着があり、お出かけや結婚式など特別な日には絹でできたものや刺繍模様のはいたものを、それ以外の時には木綿のものまたは古くなった絹のデールを着用します。デールの下には洋服を着ており、ズボンにブーツというのが一般的です。伝統的なデールは風が隙間から入り込まないように工夫されており、ウマに乗るのに適したデザインになっています。一方、現代の都市部で暮らす人々、特に女性のデールは上下がわかれたスーツ型や、体のラインにそったドレス型など多種多様なデザインになっています。都市部では洋服が普段着であり、特別な日に「おしゃれ」デールを着る人が多いです。（〔参考文献〕野沢延行 1991『モンゴルの馬と遊牧民—大草原の生活誌』原書房）



# チョッキ 〈ハンターズ〉

D0108

ウランバートル／モンゴル

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

参照資料

a



ОХИН

b



банди

c



ТЭМЭЭ

ХАНТААЗ



a 女子用 〈オヒン〉 b 男子用 〈バンディ〉 c ラクダ 〈テメー〉 (男女兼用ラクダ毛製)

小長谷先生からのひとこと

長衣・チョッキはいろいろな組み合わせをして楽しんでみてください。

# はおり 〈オージ〉（女子用長衣ベスト） D0109

ウランバートル／モンゴル

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

参照資料



уу ж



デールの上からはおります。

# 帯〈ブス〉

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

D0110

ウランバートル／モンゴル

## 参照資料

『草原の遊牧文明』

p.50



бүс



デール着用時に腰に巻く帯です。

## 小長谷先生からのひとこと

デールの色にあわせます。男性は腰より下のあたりに太めに巻くのが格好良く、女性は腰より少し上に、細めに巻くことでスタイルが良く見えます。

# ブーツ 〈ゴタル〉

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

D0111

ウランバートル／モンゴル

## 参照資料

『草原の遊牧文明』

p.50



г у т а л

二重になっており地面からの冷気を遮断します。

## 小長谷先生からのひとこと

このブーツは男性用です。女性がデールを着用する時はハイヒールやおしゃれなブーツを履きます。



# 天幕 〈ゲル〉

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

D0112

ウランバートル／モンゴル

## 参照資料

『暮らしがわかるアジア読本 ―モンゴル』 p.12 ～ p.16

『草原の遊牧文明』 p.44

## 季刊民族学

No.3 p.76 ～ p.77

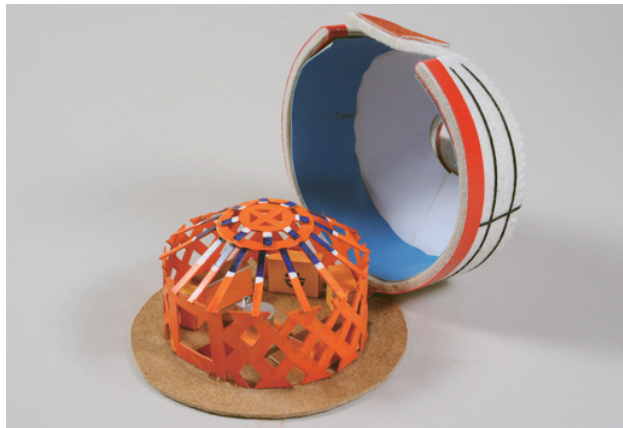
No.27 p.72

No.28 p.96 ～ p.99

No.69 p.54 ～ p.57



г э р



遊牧民の住居をゲルといいます。遊牧民は牧草地をもとめて1年に4回ほど引越しをするので、解体と組み立てが自由のできるゲルが重宝されています。気温の上がる夏には、ゲルを覆うフェルトカバーの裾をあげて風通しを良くし、寒さの厳しい冬にはフェルトカバーを二重にして熱を逃がさないようにしています。そのため、一年を通じてゲルの中は快適な環境に保たれています。ゲルの天井にある天窓からは、太陽の光が差し込むため中は明るく、雨の時には天窓にカバーをかけて雨が降りこむのを防ぎます。

(〔参考文献〕 吉田忠正著・小長谷有紀監修 2007『体験取材！世界の国ぐにー13 モンゴル』ポプラ社)

# 五畜〈タワン・ホショー・マル〉(フェルト製玩具) D0113

ウランバートル／モンゴル

## モンゴルー草原のかおりをたのしむ



### 参照資料

『暮らしがわかるアジア読本—モンゴル』p.71

『草原の遊牧文明』p.91

季刊民族学  
No.76 p.106 ~  
p.107

Т а в а н х о ш у у м а л

モンゴルの草原で家畜とされているのは、ウマ、ウシ（ヤク）、ヒツジ、ヤギ、ラクダの5種類であり、タワン・ホショー・マル（五畜）と呼ばれています。北部の一地域にはトナカイを家畜にしている遊牧民もいます。遊牧民はその土地の気候や環境にあった家畜を組み合わせ放牧しています。良い牧草を求めて季節ごとに家畜を移動させ、夏は家畜の乳を加工して乳製品やお酒を作り、冬は家畜を食べて暮らしています。家畜の毛や皮から衣類や道具を作ったり、売って現金収入を得たりしています。このように家畜は遊牧民の衣・食・住を支えるかけがえのない存在です。

〔参考文献〕 野沢延行 1991『モンゴルの馬と遊牧民—大草原の生活誌』原書房

# 銀椀 〈ムンGUN・アヤガ〉

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

D0114

ウランバートル／モンゴル

参照資料



МӨНГӨН аяга

家の主人が来客にもてなす際に蒸留酒を入れるために使用します。

# 絹布 〈ハダク〉

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

D0115

ウランバートル／モンゴル

## 参照資料

『暮らしがわかるアジア読本—モンゴル』

p.52、p.55、p.223

『草原の遊牧文明』

p.66

季刊民族学

No.85 p.62



х а д а г

ハダクは大切な相手に贈り物をするときや、女性の父親に結婚の許可をもとめに行くとき、新年の挨拶のときなどに使われます。ハダクを前に伸ばして開いた両腕の上にかけて、真ん中をたるませるようにして贈り物と一緒に相手に手渡されます。相手に対する敬意の表象であるとともに、天の神にささげる祈りのこもったものでもあります。天地神を祀るオボーと呼ばれる石塚やモンゴル人が神聖視する岩や木、石像などにもハダクが結び付けられています。モンゴルを走るほとんどすべての車のミラーにも、このハダクが巻き付けられています。

(〔参考文献〕 鯉淵信一 1992『騎馬民族の心—モンゴルの草原から』日本放送出版協会)



# 香〈アルツ〉

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

D0116

ウランバートル／モンゴル

## 参照資料

『暮らしがわかるアジア読本—モンゴル』

p.52、p.55、p.223

『草原の遊牧文明』

p.66



бойбор



артц

а р ц

a 香炉〈ボィボル〉 b 香（ねず松の芽）〈アルツ〉

香入れに灰を入れ、その上に香をおいて火をつけます。

アルツは、ハイマツの一種で、寺院では毎日燃やします。ゲル内でも清めに使われます。また、オヴォー祭や各種儀礼のときにもアルツを燃やして清めが行われます。



# 儀礼用さじ 〈ツァツアル〉

モンゴル—草原のかおりをたのしむ

D0117

ウランバートル／モンゴル

## 参照資料

『草原の遊牧文明』

p.87

季刊民族学

No.85 p.72



ц а ц а л

家畜の乳を天地の神々に捧げるために使われる道具です。遠くへ旅立つ人の無事を祈ったりする時に使われます。ツァツアルには9つのくぼみがあり、ここに乳を入れて旅立つ人の背中を見送りながら天に向かって振りかけます。ちなみに、「9」という数はモンゴルに古くからあるシャマニズムで重視されている数字です。

(〔参考文献〕 小長谷有紀 1996 『モンゴル草原の生活世界』 朝日新聞社)

# 嗅ぎ煙草入れ〈フールグ〉

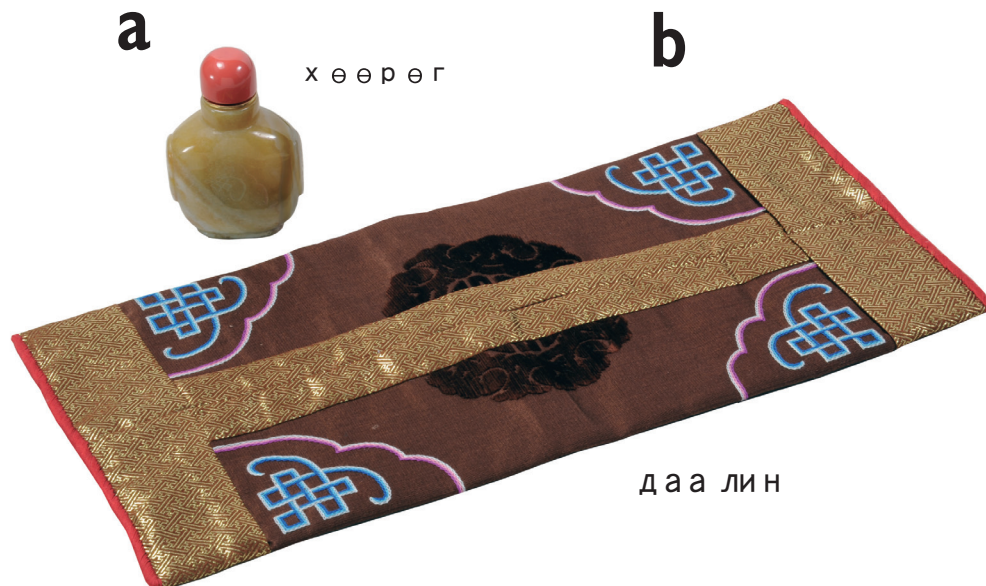
モンゴルー草原のかおりをたのしむ

D0118

ウランバートル／モンゴル

## 参照資料

『暮らしがわかるアジア読本—モンゴル』p.37、p.55



хөөрөг



a 嗅ぎ煙草入れ〈フールグ〉b 袋〈ダーリン〉

男性の必須アイテムの一つが、かぎ煙草を入れる容器（フールグ）です。客人との挨拶代わりに交換されます。主人が来客に対して右手でフールグを差し出します。来客も同時に自分のフールグを右手で差し出し、手の平の中で器用に相手のものと交換します。受けとると蓋をひっぱり粒子状の中身を少しだけ左手親指のつけ根に取り出し、鼻に近づけて勢いよく吸い込みます。（粒子はお香のような良いにおい。）蓋をしてからまた右手で相手に返して挨拶が一段落します。このフールグの材質や装飾によって、持ち主の財力とセンスが量られるといわれています。フールグを入れる絹製の袋のことをダーリンといいます。

# 相撲用衣装〈ゾドグ／ショーダグ〉D0119

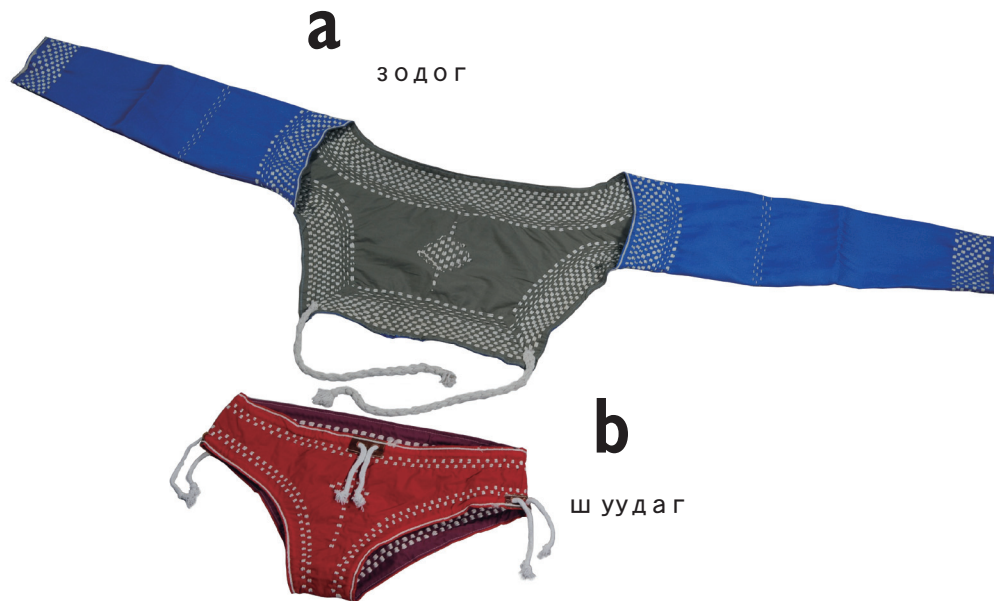
ウランバートル／モンゴル

## モンゴルー草原のかおりをたのしむ

### 参照資料

『暮らしがわかるアジア読本—モンゴル』  
p.178～p.185

季刊民族学  
No.85 p.58  
No.54 p.57



a 相撲用上衣〈ゾドグ〉 b 相撲用パンツ〈ショーダグ〉

大地が萌える毎年7月に全国各地で開かれるのが、「ナーダム（Наадам）」と呼ばれる祭りです。ナーダムとは「遊び」を意味し、競馬、相撲、射弓などの競技が行われます。

#### ■競馬（モリ・オラルダーン）морин уралдаан

競馬は5歳から13歳くらいの子供も達が騎手をつとめ、ウマの年齢によって15km～28kmを駆け抜けます。

#### ■相撲（ブフ・バリルダハ）бхбарилдах

モンゴル相撲には土俵がなく、肘や膝、頭、背中などが地面につくと負けとなりますが、地面に手をついたくらいでは負けにならないため、試合が何時間にもおよぶことがあります。豊富な技の数々は、家畜を捕まえたり転がしたりする遊牧生活の中で編み出されたといわれます。

#### ■弓（ソル・ハルワハ）сур харвах

老若男女が参加する射弓では、75m（男子）、65m（女子）先の的をより多く射落とした人が勝ちとなります。シラカバの樹皮を編んで作ったコップ型のパーツを並べたものが的となります。

〔参考文献〕野沢延行 1991『モンゴルの馬と遊牧民—大草原の生活誌』原書房、  
吉田忠正著・小長谷有紀監修 2007『体験取材！世界の国ぐに—13 モンゴル』ポプラ社）





# 馬用の道具

## モンゴルー草原のかおりをたのしむ

# D0120

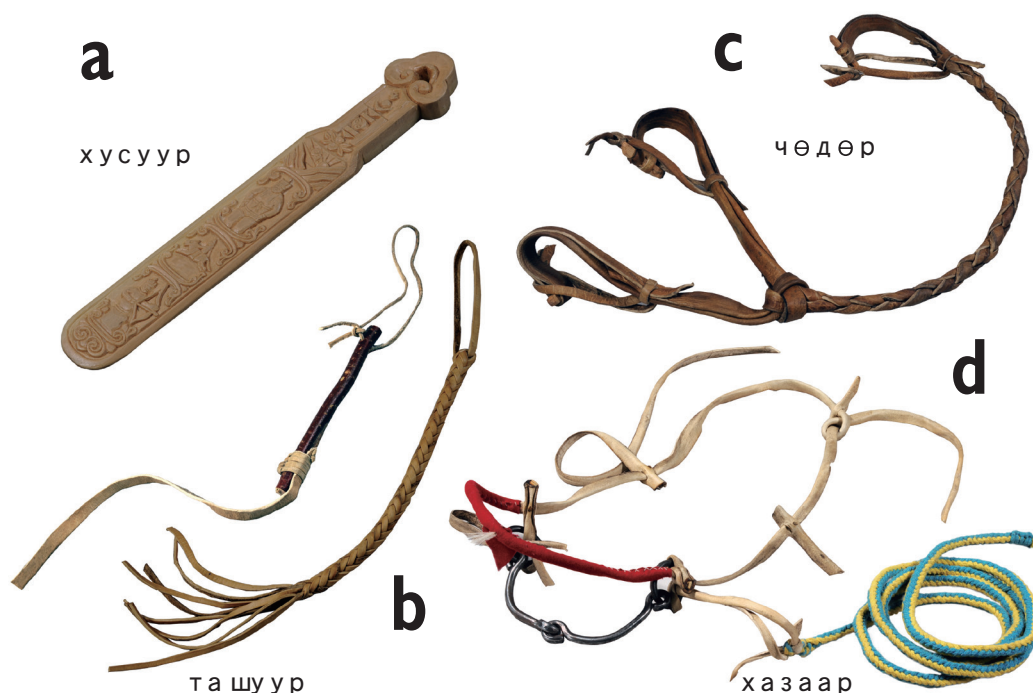
アルハンガイ県 ツェツェルノグ市／  
モンゴル

### 参照資料

『暮らしがわかるア  
ジア読本—モンゴ  
ル』  
p.178～p.185

『草原の遊牧文明』  
p.61、p.93

季刊民族学  
No.49 p.23～p.33  
No.78 p.64～p.65



a 馬用汗取りべら〈ホソール〉 b むち〈タショール〉 c 足かせ〈チュドウル〉  
d はみ〈ハザール〉

ホソールは、ウマを飼っていれば必ずある道具です。普段はゲルの梁にはさんでおかれます。ホソールをウマの体に押しあてながら沿わせ、すくい取った汗を振り落すようにして使います。汗を拭かずにおくと、体が冷えて熱を出すだけでなく、鞍のあたる部分が炎症をおこして傷になり、ウマが使えなくなってしまうため、手入れはしっかり行います。ホソールにはさまざまな木が使われますが加工しやすいヤナギが好まれ、持ち手の部分の穴には、ハダクと呼ばれる青色の絹布を巻きつけていることが多いです。

〔参考文献〕 野沢延行 1991『モンゴルの馬と遊牧民—大草原の生活誌』 原書房

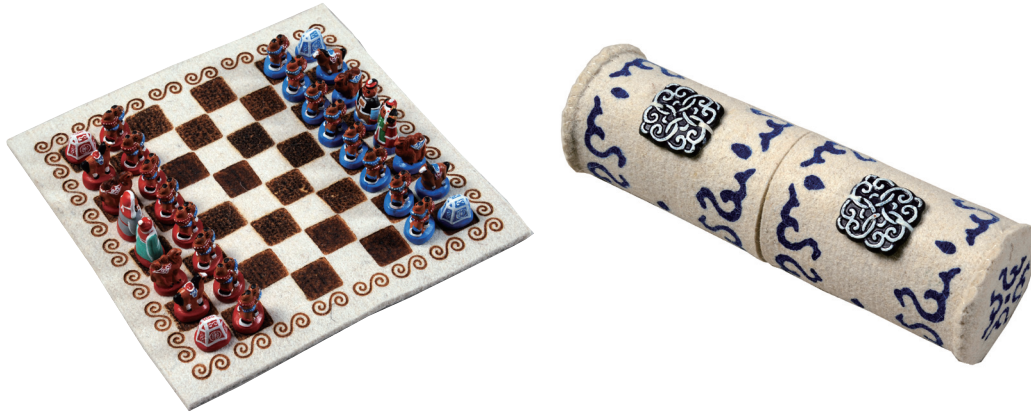
# モンゴル将棋〈シャタル〉

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

D0121

アルハンガイ県 ツェツェルノグ市／  
モンゴル

参照資料



ш а т а р

シャタルはチェスのことで、ルールも同じです。モンゴル版の駒は、以下のように対応します。

| シャタル                | チェス   |
|---------------------|-------|
| х а а н (ハーン) 王     | キング   |
| х а т а н (ハタン) 后   | クイーン  |
| т э м э э (テメー) ラクダ | ビショップ |
| м о р ь (モリ) ウマ     | ナイト   |
| т э р э г (テレグ) 荷車  | ルーク   |
| х (フー) ※ヒツジなど       | ポーン   |

※ポーンにあたる駒はシャタルによってさまざまで、同じ形で8個そろっている駒がポーンです。

# 羊のくるぶしの骨 〈シャガエ〉 D0122

ウランバートル／モンゴル

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

参照資料

『シャガイの遊び方』



ш а г а й

シャガエとは、ヒツジのくるぶしにある距骨のことで、煮込んで脂を出したらそのまま遊び道具となります。左右の後ろ足に一つずつあるので、一頭のヒツジから2つのシャガエがとれます。子ども達はこれをたくさん集めて遊んでいます。シャガエの4つの面には、それぞれラクダ、ウマ、ヒツジ、ヤギという名前が付けられており、面の形と家畜の名前をまず覚える必要があります。詳しい遊び方については、別冊『シャガイの遊び方』を参照。

〔参考文献〕 しゃがぁ編集室 1998 『シャガイの遊び方』 千里文化財団

野沢延行 1991 『モンゴルの馬と遊牧民—大草原の生活誌』 原書房

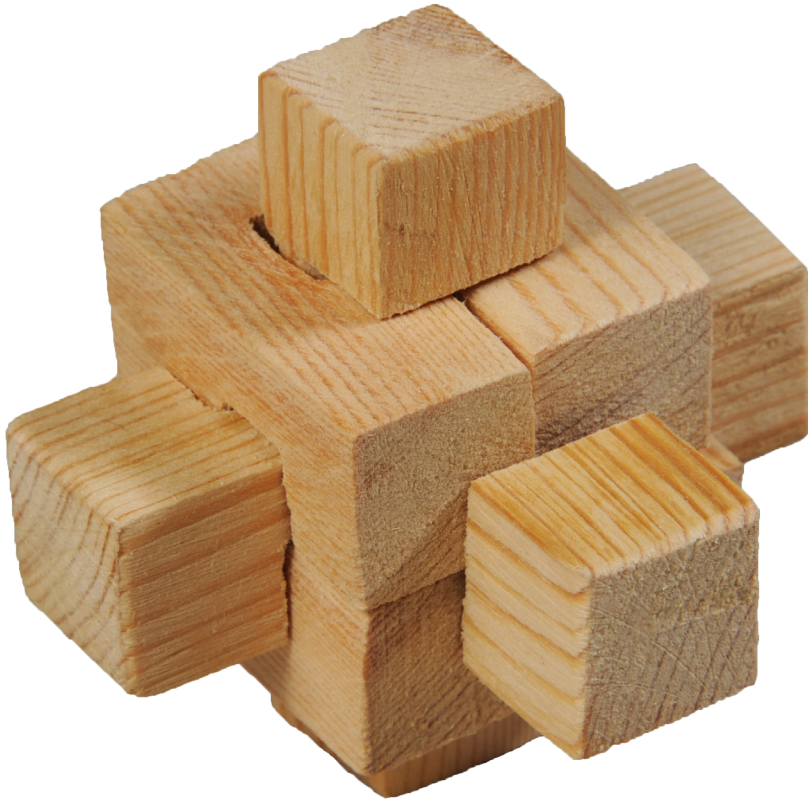
# 立体パズル 〈オニス〉

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

D0123

ウランバートル／モンゴル

参照資料



О Н Ъ С

モンゴルのパズルはその複雑さ、デザイン、彫刻、組み合わせの部品や独特の形で有名です。



国立民族学博物館



# トランプ 〈フズル〉

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

D0124

ウランバートル／モンゴル

## 参照資料

『暮らしがわかるア  
ジア読本—モンゴ  
ル』 p.38



Хөзөр

# レプリカ紙幣〈ツァーサン・ムング〉D0125

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

ウランバートル・ナラントール市場  
／モンゴル

## 参照資料

『暮らしがわかるア  
ジア読本—モンゴ  
ル』p.251



ц а а с а н м н г

通貨単位はтөг рөг（トゥグルグ：〒）。紙幣には、20,000 〒、10,000 〒、5,000 〒、1,000 〒、500 〒、100 〒、50 〒、20 〒、10 〒、5 〒、1 〒の11種類があり、硬貨はありません。1円＝約16〒（2011年9月現在）。500〒以上の紙幣には、モンゴルの諸部族を統一しモンゴル帝国を築いたチンギスハーンの肖像が、100〒以下の紙幣には社会主義革命の英雄で建国の父と敬われるスフバートルの肖像が印刷されています。1〒には獅子が描かれています。パックに入っている小さいお札は、社会主義時代のレプリカです。現在は新しいデザインになっています。

（〔参考文献〕 吉田忠正著・小長谷有紀監修 2007『体験取材！世界の国ぐに—13 モンゴル』ポプラ社）

# 国旗〈トゥリーン・ダルバー〉 D0126

ウランバートル／モンゴル

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

参照資料



төрийн далбаа

国旗の赤は火の色で繁栄をあらわし、青色は青空で平和と永遠をあらわします。左の赤地にあしらわれているのが国章の一部にもなっているシンボルマーク「ソヨンボ」。上から、炎・太陽・月、敵を押さえつける槍をあらわす三角、誠実をあらわす長方形、繁栄と目を閉じない警戒心をあらわす二対の魚を組み合わせた円、再び誠実の長方形と槍が続き、両側には堅固な城壁を意味する縦長の長方形が配置されています。社会主義時代にはソヨンボの上に星が一つ描かれていましたが、1992年モンゴル国への改称と同時に現在の形に戻されました。

〔参考文献〕 金岡秀郎 2001『モンゴルを知るための60章』明石書店

木村理子 2010『朝青龍 よく似た顔の異邦人』朝日新聞出版

森重民造 1990『世界の国旗』保育社

吉田忠正著・小長谷有紀監修 2007『体験取材！世界の国ぐにー13 モンゴル』ポプラ社

# 音楽CD 〈ホグジムCD〉

D0127

ウランバートル／モンゴル

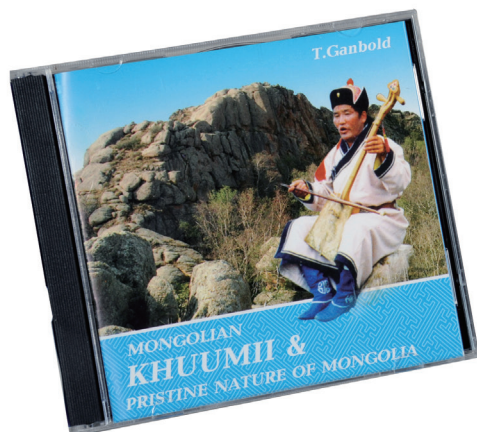
モンゴルー草原のかおりをたのしむ

## 参照資料

『暮らしがわかるアジア読本—モンゴル』p.190

季刊民族学  
No.124 p.50 ~  
p.55

a



ХӨӨМ ИЙ

b



ардын дуу

## ХӨГЖИМ CD

a ホーミー 〈ホーミー〉 b 民謡 〈オルディンドー〉

モンゴル人は歌が大好きで、さまざまな歌を唄い継いできました。モンゴル民謡のなかに、オルディンドー（長唄）と呼ばれる歌があります。歌詞には、ウマや故郷、美しい自然などが歌われています。モンゴル西部には、ホーミーと呼ばれる喉唄があり、一人で低音のだみ声と高音のメロディーを同時に歌うというもので、その音は風や水の流れを表現しているといわれています。また、欧米やアジアのポップ音楽をモンゴルの音楽とうまく融合した M - POP も若者を中心に大人気です。

〔参考文献〕 吉田忠正著・小長谷有紀監修 2007『体験取材！世界の国ぐに—13 モンゴル』ポプラ社）



# 楽器〈フグジミン・ゼムセグード〉(絵本) D0128

ウランバートル/モンゴル

## モンゴルー草原のかおりをたのしむ



### “Хөгжмийн зэмсгүүд”

#### 1. Чулуун хөгжим〈チョローン・フグジム〉

石の楽器・・・薄く平たい石を、木槌でたたいて音をだす。

#### 2. Морин хуур〈モリン・ホール〉

馬頭琴・・・その音は、まさに駆けている馬群の蹄のひびきのようにきこえる。モリン・ホールには二種類の弦がある。細い弦はジリクといって乳馬の尾っぽの毛でできている。太い弦はアルガといい、種馬の尾っぽの毛で作られている。一年をあらわす 365 本の毛を、太さで分け、弦と弓につかっている。

#### 3. Хулсан хуур〈ホルサン・ホール〉

竹笛・・・ホルサン・ホールを演奏するときには、声を出さずに話すようにくちびるを動かす。この小ぢんまりした楽器で曲を演奏するだけでなく、さまざまな音、事象、動きを表現（音まね）することもできる。

#### 4. Ятга〈ヤトガ〉

琴・・・ヤトガの弦は両手の指をつかって引っぱったり、たたいたり、押したり、はじいたり、よじったりして音を奏でる。

#### 5. Шударга〈ショダルガ〉

三本の弦からなる楽器・・・ショダルガの棹はびやくだんの木でできていて、非常に長い。胴の部分は巨大なヘビの革でできている。主に、中が空洞になっている丸い竹でたたいて演奏する。

#### 6. Эвэр бҮрээ〈エウエル・ブレー〉

角笛・・・動物の角でつくられる楽器。むかしは、獵師や牧畜民、見張り番たちの合図などとしてつかわれていた。

#### 7. Бишг Үүр〈ビシグール〉

笛・・・この楽器は、しんちゅうと銅と木で精巧につくられている。竹を薄くしたものをついて音をだす。

#### 8. Их хуур〈イヒ・ホール〉

大型の二本の弦を弓ではじく楽器・・・イヒ・ホールは 1960 年代にはじめてモンゴルでつくられた。モリン・ホールの形や和音はそのままに、寸法を大きくしたものである。

#### 9. Товшуур〈トウショール〉

丸い胴をもつ琵琶に似た楽器・・・モンゴル西部で非常に発達した楽器。胴はヘビの革や、ヤギのもののつけ根の薄革、ウシの心嚢の皮でできている。家畜の腱や毛、細い絹糸でできた弦を親指と人さし指で軽くたたくように演奏する。

#### 10. Хуучир〈ホーチル〉

二胡・・・細い弦の上を指でかるくたたいて演奏する。民謡や讃歌、物語などの弾き語りに適しており、独奏も協奏もできる。

#### 11. Лимбэ〈リンベ〉

笛・・・草原のあちこちに生えるダイオウという植物の乾燥した軸に穴をあけ吹いていたところから着想をえて、この楽器がつくられた。リンベは多くの場合竹でつくられるが、鉄やプラスチックでつくられることもある。

#### 12. Ёочин〈ヨーチン〉

洋琴・・・この楽器を四つ足の台にのせ、弦を二本の竹でできたばちでたたいて演奏する。



# 地図〈ガスリン・ゾラグ〉

D0129

ウランバートル／モンゴル

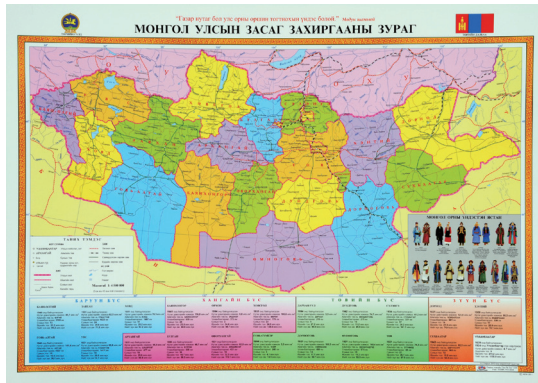
モンゴルー草原のかおりをたのしむ

## 参照資料

『暮らしがわかるアジア読本—モンゴル』裏見開き

季刊民族学

No.85 p.34～p.41



улс төрийн газрын зураг



физик газар зүйн зураг

## г а з р ы н з у р а г

a 行政区分〈オルス・トゥリーン・ガスリン・ゾラグ〉

b 地形〈フィジック・ガザル・ズイン・ゾラグ〉

国土面積は156万6500km<sup>2</sup>で、日本の約4倍の広さ。北はロシア、西と南と東は中国と国境を接しており、海には面していません。北部には針葉樹林帯が広がり、中部には草原地帯が、南部にはゴビ（礫沙漠）が広がっています。南西部には3000～4000m級の山を有するアルタイ山脈が連なっています。人口約270万人のうち、およそ80%を占めるのがモンゴル系ハルハ族であり、ハルハ・モンゴル語がモンゴル国の公用語となっています。その他に、モンゴル系、トルコ系の16部族が暮らしています。

〔参考文献〕 金岡秀郎 2001『モンゴルを知るための60章』明石書店

木村理子 2010『朝青龍 よく似た顔の異邦人』朝日新聞出版

吉田忠正著・小長谷有紀監修 2007『体験取材！世界の国ぐに—13 モンゴル』ポプラ社

# 絵画 〈ゾラグ〉

## モンゴルー草原のかおりをたのしむ

D0130

ウランバートル／モンゴル

### 参照資料

『草原の遊牧文明』

p.23 ～ p.30



## з у р а г

モンゴルのブリューゲルと謳われるシャラブの絵画を模した民族誌絵画です。遊牧民の秋の一日を表現しています。ゲルを解体して移動している人々や、ウマに鞍をつけようとしている人々、ヒツジの毛からフェルトを作っている様子や結婚式の様子などが描かれています。右上にのぞいている建物はチベット仏教の寺院です。

オプション

# 馬頭琴〈モリンホール〉

モンゴルー草原のかおりをたのしむ

D0131

ウランバートル／モンゴル



морин хуур

## 参照資料

『暮らしがわかるアジア読本ーモンゴル』  
p.186～p.189、p.205

『草原の遊牧文明』  
p.75、p.95

季刊民族学  
No.85 p.66～p.71  
No.112 p.90～p.91

取扱注意：まつやに  
が手や衣服につくと  
べたべたします。直  
接ふれないでくださ  
い。

※まつやに付

1000 年も前からモンゴルに伝わるといわれている楽器です。愛しているウマが殺されてしまい、そのウマをしのんで作られたという物語がよく知られています。日本でも「スーホの白い馬」という話が有名です。四角い胴の二弦琴で、竿の頭にウマが彫刻されています。昔は弦も弓もウマの尻尾で作られていましたが、最近では人工弦が主流です。

〔参考文献〕 梅棹忠夫 1990『モンゴル研究』中央公論社

吉田忠正著・小長谷有紀監修 2007『体験取材！世界の国ぐにー13 モンゴル』ポプラ社



国立民族学博物館